

琉球大学学術リポジトリ

ウチナンチュの越境的ネットワーク化と紐帯 ー「チムグクル」を運ぶ言語的文化ー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): ウチナーグチ, 越境的ネットワーク, アイデンティティ, 紐帯, 言語的文化 キーワード (En): 作成者: 金城, 宏幸, Kinjo, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010129

ウチナンチュの越境的ネットワーク化と紐帯 ―「チムグクル」を運ぶ言語的文化―

金城宏幸

- I. はじめに
- II. エスニック・アイデンティティの成立と言語文化
- III. ウチナンチュとウチナーグチ
- IV. ウチナンチュという「民族」意識
- V. ウチナーグチを蘇らせる三線・民謡と芸能
- VI. ウチナーグチが紐帯となるもう一つの理由
- VII. おわりに

キーワード：ウチナーグチ，越境的ネットワーク，アイデンティティ，紐帯，言語的文化

I. はじめに

20 世紀以降の現代言語学の方向を決定づけ、記号学を提唱して様々な現代思想に多大な影響を与えたフェルディナン・ド・ソシュール(Ferdinand de Saussure 1857-1913) は、言語が、「社会の成員の合意により確定した記号 [signes] の集合」(ソシュール 2007,12)であると言い、その本質において集団性を前提とするとした上で、言語と対比できるような社会制度は見つからないとした。言語活動が人間社会の中で極めて重要な役割を果たしているとして、「多少なりとも人種の特長となりうるものは、言語の持続性だけだ」(前掲 20)とも述べて、自己と他者を最も鋭く区別する要素だと述べている。

一方、日本におけるソシュール研究の地平を拓いたことでも知られる著名な言語哲学者の丸山圭三郎(1933-1993)は、言葉がそれぞれの概念に「名づけ」をするものではなく、「それが話されている社会のみ共通な、経験の固有の概念化・構造化」(丸山 1995,16)であるとして、「言語が、それ自身文化であり、思考形式である」(同)と明言した。丸山は、各言語は1つの「世界像」であり、それを通して連続体の現実を分析するプリズムであるとしたが、筆者も概ねそうした言語観に同意する。では、こうした言説を基にウチナンチュ¹⁾に関わる現代的なテーマを掘り下げてみたらどうだろうか。

本稿では、「世界のウチナンチュ大会」²⁾などのように国境を越えて模索されるようになったウチナンチュのネットワーク化に関して、越境的アイデンティティの基となる人々の紐帯をめぐって、特に、ウチナンチュの間に失われつつあると言われながらも生活の中に息づく固有の言語、ウチナーグチ³⁾について論考する。国内外における県系人のさまざまな活動における参与観察やフィールドワークなどで得られた知見をもとに、マスコミによる「県民意識調査」やその他の文献調査を交え、地理的な広がりとは多文化的な要

素を内包する存在となった「世界のウチナーンチュ」のネットワーク化について、その紐帯としてのウチナーグチの位置を捉えようと試みるものである。

Ⅱ. エスニック・アイデンティティの成立と言語的文化

「琴線に触れる」という表現があるが、人間には、その心を揺さぶる事象がある。そしてそれは、同じ生活圏で暮らす人々の間で共有され、ある人間集団に共通な文化とよばれるものの重要な部分を形成する。人々がそうした紐帯で心情的につながり、それによって一まとまりの集団となるとき、我々はその間にエスニック・アイデンティティを見るのである。そして文化的「他者」との接触や何らかの要因によりその差異性が増幅して感じられるとき、エスニック集団の認識と結束はより強固なものとなり、時に国境を越えても連帯意識を持つ、いわゆるディアスポラと呼ばれるような集団になるのである。近年、沖縄の人々にもそうした運動、すなわち国境を越えた人々の協働、特にネットワーク化を推進しようとする動きが表出することにより、「世界のウチナーンチュ」と呼ばれるような越境的エスニック集団が存在すると考えられ、そうした言説が提起されるようになった。

確かに、日本という国の中で、あるいは移民した海外の地でコミュニティを形成してきたウチナーンチュたちが、これまでとは異なる主体性を発揮しながら越境的に交流し始め、ネットワークを通して新たな社会空間を模索しつつあるように見えるのは興味深いことである。しかしながら、こうした動態は何もウチナーンチュに限ったことではない。ユダヤ人や中国人、あるいはフィリピン人といった多くの民族も同様の営為をしてきたのであり、我々の関心は、はたしてそこに、ウチナーンチュであるがゆえの特異性といったものが存在するのだろうかということであろう。そしてその探求は、「ウチナーンチュとは何か」、という究極の問いに収斂されていく作業の一つに他ならない。

ところで、エスニック・アイデンティティが成立するための基本的要因となる文化のファクターには様々なものが存在する。しかし、本稿ではそれらをあえて列挙して議論することは留保し、言語的文化と社会集団の関係性に関心を持つ筆者は、世界各地の様々な民族やエスニック集団において確認されるように、重要な文化因子としての「言語的文化」をめぐって、ウチナーンチュのアイデンティティと集団の紐帯について考察することにする。すなわち、ウチナーンチュのアイデンティティ形成においても言語的文化が重要な役割を果たしてきたことを今一度確認した上で、それが沖縄の人々に共有される背景の特殊性について論考し、そうした言説が現在の越境的な空間においても有効で、それが国境を越えたディアスポリックなコミュニティ間の紐帯として機能し続けるかということ考察してみたい。はたして、岡本太郎が「この土地に生まれた自然で豊かな表現（略）方言と片づけるにはあまりに貴重で美しい」（岡本 2001, 31-32）としたウチナーグチは、世界のウチナーンチュを結ぶ紐帯としての役割を担い続けているのだろうか。

Ⅲ. ウチナーンチュとウチナーグチ

ウチナーンチュがウチナーンチュたる所以は、当然なことながらその文化にある。その沖縄の文化は、時代と共に変容を余儀なくされるものでもあるが、世代間でどのように継承されるかは、すなわち今後のウチナーンチュ・コミュニティのあり方を決定付けるものである。「第4回世界のウチナーンチュ大会」に各地から参集したリーダーたちは、世界に広がる県系人ネットワークの文化的核は「チムグクル」⁴⁾であり、それが県系人ネットワークの求心力であると確認し、多くの参加者の賛同も得られたように見える。

沖縄の文化は、「チムグクル」に集約される精神風土の周辺に、その芸術的表現手段としての伝統芸能などが合わさって表象されるという考え方は、広くウチナーンチュの間に共有されているようである。そして、このキーワードの表現方法に象徴されるように、沖縄の精神文化を伝える重要な要素がその言語、ウチナーグチであると考えられるウチナーンチュは今でも少なくない。沖縄学の著名な研究者である外間守善は、この点に関連してその著書『沖縄の言葉と歴史』の中で次のように述べる。

統一国家のでき上がる過程、あるいは統一国家の中に組み入れられる過程で、共通する言語に関心が寄せられたり、民族意識が喚起させられたりすることは、沖縄だけに限られる特殊な現象ではなく、どこの国、どこの地方の言語史にも見つけだすことのできることはある。ただ沖縄におけるその部分が、きわだって特徴的であることは事実なのである。（外間 2000, 343-344）

ここで言語学者の外間が言っているのは、ウチナーグチがその言語の語彙や構造自体に、他の言語に優れて民族意識扇動力や文化伝播力を持っているということではなく、ウチナーンチュの「言語生活の歴史の中に時代思潮のうねりや、生活集団の起伏をうかがうことができる（外間 2000, 343）」という言語の社会性という観点から、ウチナーンチュの生活史の中の苦悩と煩悶がウチナーグチの使われ方に鮮やかに反映されているという点で極めて特徴的だと述べているのである。どこの土地でも人々がその言語に愛着を持つように、ウチナーグチだからではなく、沖縄に生まれ育ったから郷土と生活に根ざした言語であるウチナーグチを愛おしく感じるのだが、そうした一般的な生活言語への愛着という度合いを越えた意味を持つ沖縄の場合の特殊性とは何だろうか。

現在、ウチナーンチュの間ではウチナーグチは消滅の危機にひんしていると危惧されているが、一方で、日常生活への復活という希望を含めた活発な取り組みが展開されている。こうしたことの具体的な事例を沖縄県、海外の沖縄系コミュニティ、日本本土の各地に観察しながら、方言継承の重要性が叫ばれる「沖縄的な」背景を考察してみよう。

1. 沖縄県におけるウチナーグチ

琉球新報社が2006年に実施した「沖縄県民意識調査⁵⁾」によると、県民の94.3%が沖縄文化を誇りに思い(2001年調査より2.6ポイント増加)、同時に90.3%が方言(ウチナーグチ)への愛着を持っている(同じく1.5ポイント増加)ことが判明している。調査結果報告によると、実際に方言を使いこなせるのが約半分の52.6%になった(2001年調査よりも3.2ポイント減少)にもかかわらず、愛着は極めて強い。興味深いことに、子どもたちの方言使用に関する設問では、「使えるようになってほしい」が85.5%に達し、2001年調査より3.4ポイント増加しているのである。文化に誇りを持ち続けていて、方言はあまり使えなくなっても強い愛着を感じ、自分ができなくても子どもたちには習得してほしいというのである(琉球新報2006, 25-28)。

こうしたことが背景にあり、近年ウチナーグチの普及活動に関わる団体の活動が盛んである。2000年には大学の言語研究者や言語普及実践家、方言ニュースキャスターなどの有志が結集して「沖縄方言普及協議会」が設立され、方言新聞なども発刊されている。2009年2月には、「特定非営利法人うちなあぐち会」が認可されており、しまくとぅば⁶⁾講座の開設や講師の養成、小学校でのクラブ活動の支援など、しまくとぅばに関するあらゆる社会活動に取り組んでいる。

図1で見られるように、沖縄県におけるウチナーグチの使用状況は、特に若い世代で危

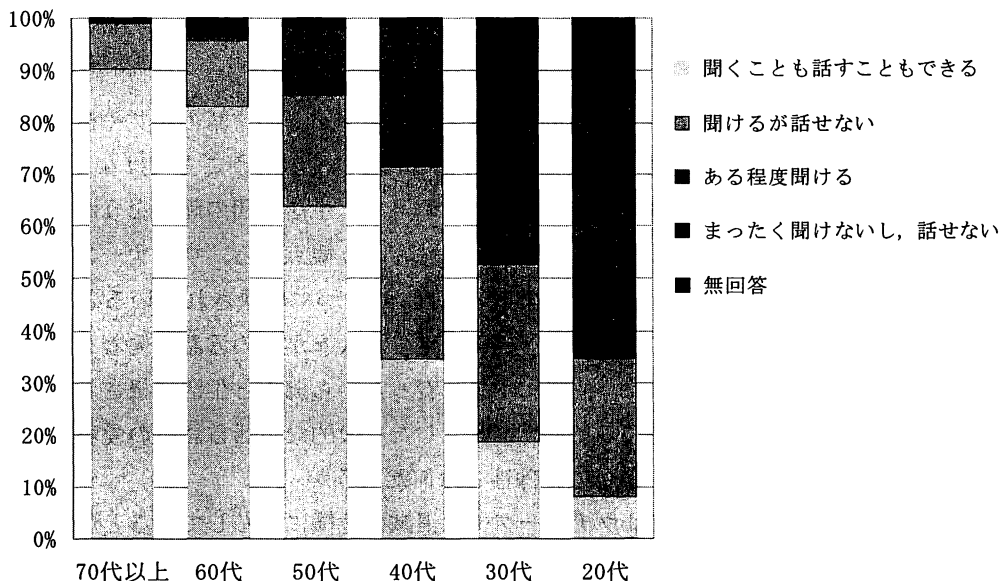


図1 沖縄県民は方言をどの程度使えるか

資料：『沖縄県民意識調査報告書』より

機的な状況であり、すでに手遅れだとする専門家も少なくないが、一方で、そうした状況に抗するような動きが盛んになっていることも事実なのである。

では、現在の沖縄県民がこうした状況であれば、世界各地のウチナーンチュはどうだろうか。ここに、海外における県系コミュニティのウチナーグチをめぐる言語文化的状況について象徴的な事例を見てみよう。

2. 米国（ハワイ、ロサンゼルス）

沖縄人海外移民の嚆矢とされる 26 人オアフ島に上陸して以来、最も早く海外ウチナーンチュ・コミュニティが形成されたハワイでは、沖縄人がはじめてナイチ（沖縄人以外の日本人）と集団で接触し、その差別や軋轢という異文化接触の中でアイデンティティが表出してきたことはよく知られている。ハワイの日系人研究者も、ナイチとウチナーンチュを区別する最も大きな要因が「言語」であったと指摘する（Kaneshiro 2002, 80）が、そうした記憶は、現在のように時代背景や言語状況が変わってもいまだ風化せず、差別への抵抗というよりも独自性の主張として継承されている。社会学者の白水繁彦は、ハワイ・オキナワ連合会の会長がわざわざウチナーグチを年間の活動方針にする背景を次のように報告している。

主流社会の文化圧力の中では、こうして、絶えず出自文化との間でフィードバックが必要なのだ。（略）出自文化に立ち返って気を引き締める必要がある。アイデンティティということには独自性という意味もあるが、オキナワが独自性を主張するためには、主流社会の言語である英語でもいけないし、まして、日本における主流社会の言語であるヤマトグチでもいけない。どうしてもウチナーグチで善なる概念を打ち出さなければならない（白水 2004, 38）。

米本土に目を転じると、カリフォルニア州ロサンゼルスでは、2009 年に北米沖縄県人会創設百周年の節目を迎え、年間を通した記念行事が推進されたが、すでに 2 期を務めあげていた比嘉朝儀氏⁷⁾が再び会長に選出されたのは、重要年度における県系人の「顔」としての指導力への期待が寄せられていたことによるようだ。沖縄の芸能を愛好する比嘉氏は、沖縄県内の新聞などに幾度も掲載されているように、2002 年に「ウチナーグチ・クラス」を開設したことで知られ、「シマクトゥバこそがチムグクルの原点だ」として、ウチナーグチの普及を県人会の事業方針の一つに掲げている。英語を母語とする世代もウチナーグチで親交を深めているとのことだが、2006 年の「世界のウチナーンチュ大会」では受講生のグループを引率して帰沖し、先述の沖縄方言普及協議会とのウチナーグチ交流会を盛況に催した。最近の新聞報道によると、ウチナーグチ・クラス開講 7 周年記念祝

賀会が北米沖縄県人会館で催され、沖縄系アメリカ人たちが次々とスピーチや寸劇をウチナーグチで披露したという⁸⁾。創設から100年を迎えた同会は、沖縄県人会としては北米最大のもので、恒例の新年会には約700人が集うまでに成長しているが、このクラスと併せて25芸能教室で構成する芸能部の取り組みが活発だ。

次に、沖縄系コミュニティの存在が際立つ南米に目を転じ、ウチナーンチュが異文化接触を日常的に体験する中で、主流文化の大波にもまれながら沖縄文化の世代間での継承に腐心する様子や、故郷沖縄の文化変容に向けるまなざしについて事例を述べる。

3. 南米（ペルー、ブラジル、アルゼンチン、ボリビア）

第4回世界のウチナーンチュ大会の準備が進みつつある2006年3月29日、沖縄県議会は9月18日を「しまくとぅばの日」とする条例の制定を全会一致で決議した。県議会で議員発議によって行政関係条例が作られるのは、復帰以降3件目という異例のこのようで、その震源地は海外のウチナーンチュ・コミュニティにあったようだ。

新聞報道⁹⁾によると、県人ペルー移住百周年記念式典出席などのため南米を訪問した県議会議員団が、現地の県系人がしまくとぅばを大切に継承している様子を目の当たりにして深く感動したことがきっかけとなり、超党派で制定の動きが本格化したという。「ウチナーンチュならウチナーグチを大切に下さい」と諭されたのであろう。条例の要旨では、「しまくとぅば」を「本県文化の基層である」とし、「次世代へ継承することが重要である」と明言している。

10万人を超える県系人が在住するブラジルでは、全国40支部を束ねる沖縄県人会の現副会長の与那嶺真次氏（ブラジル生まれ育ちの沖縄系二世）がWUB（ワールドワイド・ウチナーンチュ・ビジネス・アソシエーション）¹⁰⁾の会長も務めた（2006年～2008年）が、沖縄県人が気後れするほどウチナーグチが上手い。経済交流団体のリーダーを務めた与那嶺氏も「チムグクル」が身上だが、沖縄の伝統風習である祖先崇拜などに関するウチナーグチを交えての講演が好評で、ブラジルのみならず、アルゼンチンでの県人の集会に招かれ大喝采を浴びたりしている様子が伝わってくる。ブラジルにウチナーグチの上手い県系二世が多いというのはよく知られた話だ。

ボリビアでは、現在でもウチナーンチュが集住する移住地にオキナワという正式な行政区画（地名）がある。筆者は平成22年の2月に初めて当地を訪れたが、「もう一つの沖縄」と称されるように、人々と接していると、沖縄を髣髴とさせるというよりは、沖縄よりも沖縄らしいとでも言いたくなるような情景がある。いつか見た風景とでもいうのだろうか、遠い異国の地で不思議な懐かしさをおぼえる。沖縄からやってきたというと、会話の多くが自然とウチナーグチになることが多かった。移民一世の人々はいうまでもなく、移住地に生まれ育った県系二世も、ほとんどがウチナーグチを理解するという。本物の沖縄方言

は南米に残っているとされたりするゆえんだ。

このように、ウチナーグチが、たとえ極めてマイナーな言語であっても、ウチナーンチュの最も重要な文化的要素として、それが現在の沖縄県よりも「良好に」保存され継承されている社会空間が海外のウチナーンチュ・コミュニティの中にいまだ残存しており、その存在が現代の沖縄県民にも刺激となって還流しているということである。

最後に、日本本土でのウチナーグチの状況を考えてみよう。

4. 日本本土のウチナーグチ

日本本土においては、本土方言（標準語）との言語文化的な距離感が海外における外国語の場合と比較すると近いことや、日常生活上の差別からの回避、沖縄人自身の劣等感などにより、川崎市鶴見区や大阪市大正区などウチナーンチュの集住地域を除くと、言語的な同化の状況は海外とほとんど変わらない、あるいはより進んだと言えるかも知れない。昨今の沖縄ブームで一定の関心は集めているようだが、一般的に言ってウチナーグチ離れは顕著である。日本本土に在住するいわゆる沖縄二世、三世よりは、ボリビアは言うに及ばず、ハワイやブラジルの県系人の方がウチナーグチの運用能力は高いのではないかと思うことがある。

もちろん、沖縄文化に対する深い関心からウチナーグチに強い興味を持ち始める者もあり、例えば、作家の佐藤優氏¹¹⁾は、沖縄方言は自身に流れる「沖縄の血を呼び起こす」と言い、最近になって本格的に勉強しているとのことである。佐藤は自身の外国語習得の経験や、ヘブライ語がよみがえった事例などに言及し、ウチナーグチの文字記録を残すことで、言語危機を防ぐことができると断言し、県内の若者にウチナーグチの学習を進言している¹²⁾。

こうしてみると、ウチナーグチの使用は、県内でも危機的な状況にあり、海外や日本本土ではより急速に後退している一方で、ウチナーンチュのアイデンティティの証左としての特異な言語の継承に強い意欲を持つようになった社会心理的状况も見えてくる。従来、固有の言語とアイデンティティを明確に意識するという事は、その集団が「民族」を成していると定義することが普通であった。実際、アイデンティティを論じる際に必ずと言っていいほど議論にのぼる言語について考えるとき、明らかに変容しつつあるものの、ウチナーンチュは国境を越えた言語共同体を形成しているといえるだろう。

IV. ウチナーンチュという「民族」意識

最近では沖縄の人々を指すことばとして「琉球民族」という言い方はあまりしなくなり、特別な場合を除いて、文字通り単に沖縄の人という意味で「ウチナーンチュ」という沖縄語が使われる。もちろん、「ウチナーンチュ」ということばも、もともと「ヤマトンチュ

(大和人,日本人)」のカウンターイメージとしての意味を持って使われてきたのであり、このことばが使用される限りそうした自己像を内部に持ち続けるのだろうが、現代では「民族」というほど明確な意識を持って使う者は少ないのではないだろうか。しかしながら、このことは、沖縄の人々が自己の文化や伝統に特異性を認めなくなったということではなく、日本という版図に包摂されていく過程でその境界を見失いそうになりながらも、今度はグローバリゼーションの進展と世界的な文化認識の潮流に刺激を受け、新たな地平を開こうとしている動きがあることも事実である。

このように、「民族」という前提を含意したナラティブではあまり語られなくなったが、特異な言語と文化、そして集団の歴史を有すると自認するウチナーンチュは、国内のみならず海外においてもコミュニティを形成し、今では、「越境的なエスニック集団」としてのイメージが表出しつつある。こうしたことは、沖縄県の主導で行われる国際的な一大イベント「世界のウチナーンチュ大会」が回を重ねるごとに拡大することで実体化され、2000年のハワイでの沖縄移民百周年祭を皮切りに、2006年にはペルーで、そして2008年にはブラジル及びアルゼンチンでの沖縄移民百周年記念行事が現地でも盛大に挙行されたことで確認され、一つの盛り上がりを見せた。

ところで、近年のウチナーンチュの心理に、自分たちが一つの「民族」であるとの意識が深く刻まれたのは、薩摩藩の侵攻(1609年)による属国化や、日本国家に組み込まれる契機となる琉球処分(1879年)という歴史を経て、おそらく、明治政府による同化政策を通じた皇国民化教育が行われた時代であろう。沖縄戦後(1945年)の異民族支配から脱却して「祖国復帰(1972年)」への運動を展開した時代にも民族としての一体感が高揚されたはずである。そういう時代におけるウチナーンチュ・アイデンティティとは、「ウチナーンチュ」対「ヤマトウンチュ¹³⁾」という二項対立のなかで、より自己防衛的な意味での民族意識のなかで形成されてきたのであったが、そうした部分を引きずりながらも、社会環境の変化とともにアイデンティティを再編成し、海の彼方へもネットワークを拡大しながらグローバルなアイデンティティを模索しようとしているのが、21世紀の「世界のウチナーンチュ」を標榜する人々が目指しているものである。

第4回世界のウチナーンチュ大会に、世界21カ国から4,937人という驚異的な数の参加者があったように、ウチナーンチュに集団としての志向や行動があるのなら、そこにはアイデンティティ、すなわち集団の帰属意識が存在するということであり、集団のアイデンティティが介在することは確かに「民族的」な集団であるといえるだろう。民族というものが可変性を宿命とし、スチュアートが言うように、「民族はあると思えばあり、ないと思えばない、つまり、鶴のようなもの」(スチュアート 2002, 25) だとしても、現在、エスニック集団として越境的なネットワークを志向する動きが確認されるのであれば、その領域内で生活する人たちにとっては、民族的な意味での「ウチナーンチュ」

が存在するといえるだろう。そして、その領域内で生活する人たちは、人々を結びつける紐帯の重要なものとして、ほぼ例外なく沖縄の言語を強く意識しているということである。

V. ウチナーグチを蘇らせる三線・民謡と芸能

先に、沖縄県民はウチナーグチを自分たちの重要な文化遺産として保存したいと考える反面で、実際には失いつつあり、失いつつはあるが、復活させたいと切望している複雑な状況を提示した。このことは、沖縄文化とウチナーンチュのアイデンティティの現状と将来像を考える上で、重要な示唆を含んでいる。

ウチナーンチュによってその言語文化が維持されてきた具体的な経緯は、言語弾圧や被差別体験、それに伴う苦悩や抵抗などにおいて、世界の他の民族やエスニック集団に共通した部分も多い。人の移動が拡大し、経済活動がグローバル化する中で、もともと使用人口が少なく、生活上の実用性が少ないことにより言語衰退が進行したとしても、それは珍しいことではない。しかしながら、ウチナーンチュの場合、文字記録が大眾に共有されてなかった状況を考慮すると、その保存状態はむしろ良好と取れないこともなく、少なくとも、失いたくないという意欲は他の言語集団よりも顕著といえるかも知れない。それは次のような理由によると思われる。

沖縄の場合、人々が三線や民謡に親しみ、舞踊やエイサー¹⁴⁾などの伝統芸能が広く愛好されており、それが言語文化と不可分に密着していることも一つの重要な背景としてあると思われる。人気を博した映画『ナビーの恋』¹⁵⁾などで、何かにつけて三線に合わせて踊る芸能好きなウチナーンチュたちが描かれていたが、やや誇張した印象をうけるものの、沖縄の生活のひとコマと言えなくもない。例えば、本土出身者が沖縄での生活で驚くことの一つに、結婚披露宴の招待客の多さが挙げられるが、同時にそこで演じられる親戚・友人たちによる余興の多さに感心するという。しかも、そうした祝儀の場で必ずと言っていいほど最初に披露されるのが琉球古典音楽の楽曲「かぎやで風」と舞踊であり、最後は決まって「カチャシー」¹⁶⁾で御開きになるのである。こうした祝宴の光景は、海外のウチナーンチュ・コミュニティでも同様であり、時に沖縄県での様子を凌駕するのではないかと思う場面に居合わせることもすらある。琉球新報社の『沖縄県民意識調査報告書』によると、図2に見られるように、沖縄県民の好きな沖縄文化の上位3分野は、1位「三線・民謡」(74.4%)、2位「エイサー」(64.4%)、3位「舞踊」(53.2%)とのことである(琉球新報 2006, 29)。これらの中でも特に県民が最も嗜好する「三線・民謡」は、確かにウチナーグチの維持と不可分の関係にあるだろう。

ちなみに、この『意識調査報告書』によると、沖縄県民が好きな沖縄民謡は、「ていんさぐぬ花」が断然トップである(琉球新報 2006, 30)。ウチナーンチュで知らない人はいないと言っていいだろう。

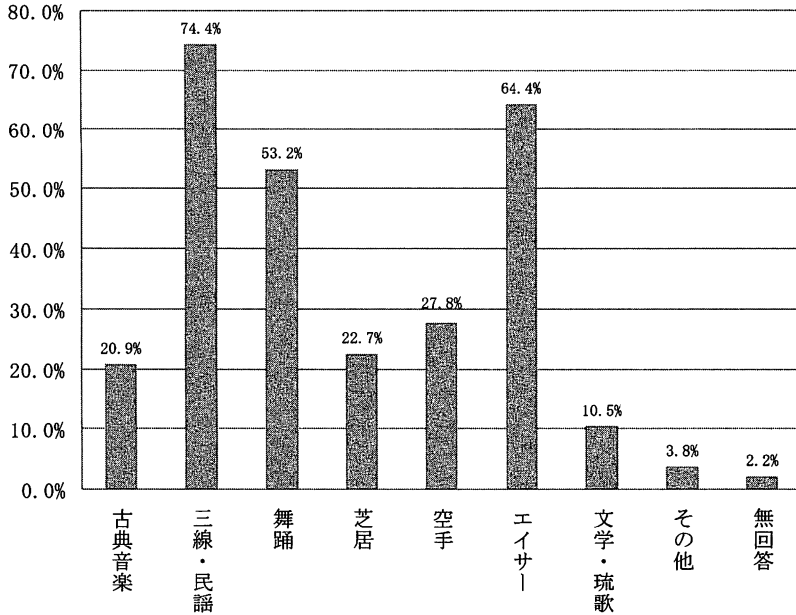


図2 沖縄県民が沖縄文化の中で好きなもの

資料：『沖縄県民意識調査報告書』より

ところで、最近、琉球舞踊が国の重要無形文化財に指定されたという大きなニュースに接することになった。国の文化審議会は2009年7月17日、新たな国の重要無形文化財に「琉球舞踊」を指定し、その保持者として合計39人を認定（総合認定）するよう文部科学相に答申し、9月2日に発表された官報告示により正式に決定された。国の重要無形文化財として総合認定を受けたのは、県内では「組踊¹⁷⁾」の1972年以来37年ぶりの2件目である。琉球舞踊は、宮廷舞踊から民衆に親しまれる芸能へと変遷・発展し、海外へ移民で渡った沖縄の人々によって世界中に広がった。沖縄県内や海外のウチナーンチュ居住地には多くの琉舞道場があり、師匠や門下生の国際的な往来も活発である。大衆が愛好する伝統芸能の今回のような公的な“ブランド化”はその継承・発展に弾みがつくというのみならず、すなわち言語文化の維持にも好ましい影響が及ぶであろう。

最近、日本本土では、いわゆる沖縄系ではない人々の間でも“沖縄ブーム”や“癒し”の文化に魅せられて、三線などを取り入れた沖縄の音楽や踊りが愛好されているようだが、関西地区をはじめ、東京や愛知県などでの「沖縄フェスティバル」では多くの観客を集めている。沖縄を体験したことのない海外の若いウチナーンチュたちの間でも、沖縄文化の実践としての太鼓やエイサーなどは絶大な人気を集めており、「琉球国祭り太鼓」は沖縄系の人々を中心に、世界7カ国にその支部を広げている。先述した北米沖縄県人会の年間

を通した百周年記念行事の最後は組踊りの上演であったが、芸能研究家の勝連繁雄は、こうした芸能・文化と沖縄の方言との結び付きが密接であるとして「方言文化」と呼び、「方言を解しないでは、どうしようもないものばかりである」（勝連 2000, 150）とする。

このように沖縄の言語は、三線・民謡を始めとする伝統芸能に支えられており、言語はまた、そうした芸能の継承・発展に重要な役割を演じているのである。両者の相互補完性は、例えば、米国におけるヒスパニックと呼ばれる人々のスペイン語とサルサなどのラテン音楽・ダンスの関係よりも濃密に一体化していると、筆者には感じられる。

VI. ウチナーグチが紐帯となるもう一つの理由

実は、ウチナーンチュがウチナーグチに特別な愛着を持ち続けている背景には、人々に深く愛好される歌三線や芸能と不可分な関係にあるということ以外に、もう一つ重要な理由がある。先に、外間守善のことばになぞって、ウチナーグチは、ウチナーンチュの生活史の中の苦悩と煩悶が色濃く反映されているという点で極めて特徴的だと述べた。そしてここでいう苦悩と煩悶とは、すなわち沖縄の人々が琉球処分後に方言を喪失して（させられて）いった記憶であり、さらに究極的には、方言でいとなまれた平和なくらしと愛する者を突然奪われた戦争体験である。

過去に沖縄では、450年もの間、琉球王国の文化が自立的に栄えた時代があったが、その時代には、政治的首都である首里の言葉が王国の共通語として使用されていた。それは明治に至るまで連綿と続けられてきた沖縄人の言語生活にほかならないが、少なくとも沖縄島（奄美、宮古、八重山などを除いて）における大衆語であり文化語であった。その言語生活は、明治政府による琉球処分（併合）、つまり武力による強制により大転換を余儀なくされる。これは、その後現代に至るまで標準日本語が琉球語（ウチナーグチ）を駆逐していく歴史の始まりとなるのであるが、その過程の中で沖縄人が劣等意識を植え付けられ、文化的喪失感を強く味わったのは言うまでもない。

この言語変革は、昭和の初めごろにはひとときわ勢いを増し、県の方針で標準語励行という名の方言撲滅運動があった。この頃には標準語問題が社会的な啓蒙運動の様相を呈するようになり、進歩的、革新的な教育者や役人は率先して励行し、家庭でも標準語を使った。推進派の人々にとっては、言語問題を通した沖縄の近代化への焦慮であったことに違いないが、結果として沖縄人のところに深刻なひずみを生じさせたことも否めない。筆者も、幼いころには祖母と過ごす時間も多く、近所の子供たちとも方言を使用して遊ぶのが自然であったが、小学校に上がる時期になると、家庭では方言を使用しないよう幾度となく注意された記憶がある。

こうした時代を経て、沖縄の人々はさらに過酷な運命に巻き込まれていく。太平洋戦争である。唯一の激しい地上戦といわれる沖縄戦では、“鉄の暴風”と称されるように地形

が変形するほどの砲弾が撃ち込まれ、沖縄は文字通り焦土と化した。戦争を知らない世代のために、最近になってやっと重い口を開き始めた体験者の話によると、戦時下の様子はまさに「地獄絵」のようだったという。そして戦火を生き延びた人々にとって何よりも辛かったのは、いうまでもなく、愛する肉親を無残に失ったことである。

軍人よりも一般住民の犠牲者が多いのが沖縄戦の特徴で、約15万人もの県民、つまり当時の人口の約4分の1が亡くなっている。特に、最後の激戦地となった沖縄島南部地域の村では、いくつもの集落で一家全員が死亡、あるいは住民が全滅に近い状態があった。犠牲者のあまりの多さに、戦果を生き延びた人々が、自分たちのことを「艦砲ぬくえーぬくさー」（艦砲射撃の食い残し）と深い悲しみを込めて呼んだほどであった。砲弾の下を逃げまどい、負傷し、飢えに苦しみ、マラリアに倒れ、身内を亡くした人々にとって、それは文字通り「筆舌に尽くし難い」体験であったに違いない。実際、戦争で一度に両親と妹を失った筆者の母は、結局ただの一度もその体験を話すことはなかった。

いま筆者の手元に一冊の沖縄戦詩集がある。詩の部門で「おきなわ文学賞」（財団法人沖縄文化振興会主催、第3回）を受賞した名嘉憲夫氏の作によるものだが、冒頭に次のような序文がしたためられている。

この拙い詩集は、沖縄戦に巻き込まれた住民たちや家族の一員を失った人たちがどういう気持ちだったかを想像して書きました。そのためには、どうしても標準語ではなく「沖縄語（うちなーぐち）」で詩を書く必要がありました。標準語で書こうとしても、文章が出てこないのです。ですから、まず頭に浮かんだ「沖縄語（うちなーぐち）」で詩を書き、しばらくして標準語に訳しました。（名嘉 2008, 5）

言語生活の観点でいえば、いかなる言語文化圏の人であれ、愛する人が突然無残な死をとげたとき、日々の生活の中でその人と情愛を交わしたことばのやさしさと抑揚、ぬくもりを忘れることができるだろうか。そうした人々にとっては、戦後64年の歳月が流れても、その時は止まっている。ウチナーンチュが集団で体験した悲惨な出来事は、ウチナーグチの世界のまま、人々の記憶に留まっているのである。ウチナーンチュがウチナーグチに強い愛着と郷愁を抱き、その言語世界が失われていくことにことのほか危機感を募らせるのは、そうした記憶を心の奥に持ち続けている人々の存在があるからだとも思う。

Ⅶ. おわりに

詩人・芸能研究家の勝連繁雄は、ウチナーグチでよまれる琉歌と歌三線にウチナーンチュの精神世界が表現されているとの観点から、次のように解釈を加えている。

ウチナーンチュは、歌三線のなかに、みずからの心と、その心を大きく包み込む感性を同時に感受するという精神行為を伝統としてきたと言い換えてもいい。組踊以前に琉歌があった。それを日常的情緒とする心があった。だが、それに満足しない心が歌三線を生み出した。（勝連 2003, 31）

ウチナーンチュの心「チムグクル」が、勝連のいうように琉歌（ウチナーグチ）と歌三線の中に育まれてきたものだとすれば、歌三線や芸能が愛好される限りウチナーグチが消滅することはないのではなかろうか。なぜなら、ことばは文化であるという次元を超えて、そうした精神世界を形成する重要不可欠な要素を防衛しようとするのは、人間としての本能だからである。

さらに、チベット仏教最高指導者ダライ・ダマ 14 世が来沖の際に印象を述べたように、沖縄が、「戦争で命を失った方々への祈りが息づいている場所」¹⁸⁾であるとすれば、そうあり続ける限りは、その深い情念の記憶が刻印された言語世界が忘れ去られることはないのである。

小坂井敏晶は、著書『民族という虚構』の中で、「民族は虚構に支えられなければ成立しない現象だが、我々の生存を根底から規定している現実でもある」（小坂井 2002,59）という。そして、どんな文化的要素でも時間と共に必ず変化し、民族や文化には本質はないとした上で、「固定した内容としてではなく、同一化という運動により絶え間なく維持される社会現象として民族や文化を捉えなければならない」（同 191）とする。そういう意味では、異なる国々に生活するウチナーンチュの間に、ネットワーク化へと向かう運動と紐帯を求める心が確認されるのであれば、そこには越境的社会空間としての「世界のウチナーンチュ」が存在するといえるのかもしれない。

確かに、ウチナーンチュのウチナーグチ使用度が近年急激に低下してきたとは現実であるし、それは沖縄県内のみならず、どこの県系人コミュニティにおいても大同小異である。しかしながら、その事実だけで、ウチナーンチュの越境的なネットワーク（アイデンティティ）を形成する紐帯が言語ではなくなったと単純に判断するのは拙速である。それは日常生活のコミュニケーションの道具としてよりも、ウチナーンチュの文化を理解するための重要な鍵として大切にされ継承されていくだろう。逆説的だが、今やウチナーグチは、それが広く話されていないからウチナーンチュの越境的アイデンティティの紐帯ではなくなったのではなく、歴史の中で紡いできた沖縄の伝統文化と精神世界を失いたくないために「ウチナーグチを忘れまいとするチムグクル」こそが、今のところ、紐帯としての役割をはたしているのだとも言える。

注

- 1) 琉球語（沖縄方言）で、もともと沖縄人を意味するが、ここではより広義の沖縄系の人びと（外国籍を含め）を指して使用する。沖縄本島以外（例えば宮古）の人などに、ウチナーンチュとしてくくられることに違和感を覚える人もいるが、本稿では現在の沖縄県の地理的範疇にルーツの関わりを持つ人々としてとらえる。
- 2) 1980年代に、沖縄のメディアによる「世界のウチナーンチュ」を意欲的に取り上げる試みなどを背景に、県民と世界に散在するウチナーンチュたちが連帯感を再認識し、国境を越えて共鳴し合うようになる。こうした「世界のウチナーンチュ」意識が盛り上がりみせるなか、1972年の日本復帰後20周年という節目を数年後に控えて、沖縄県のあらたな振興策を模索し続ける県政の施策の延長線上に、移民一世の故郷への想いと二世・三世などのルーツ探しを熱望する声、そして沖縄県民の誇りと希望を将来に見出したいというベクトルが交差する形で、1990年（平成2）、記念すべき「第1回世界のウチナーンチュ大会」がその開催をみる。その後、第2回（1995年）、第3回（2001年）、第4回（2006年）と5年毎の開催を果たし、ウチナーンチュの越境的な連帯を強化しつつ、その参加者も増加し続けている。この極めて沖縄的で画期的な一大行事は、一方で、財政的な負担が大き過ぎるとして、第3回大会ではその継続を危惧する声もあった。しかし、第4回大会に世界21カ国から4,937人が参加した盛況にその意義を再確認した県政は、2011年の第5回大会に向けた実行委員会の準備を始動させている。
- 3) 沖縄の人が話すことばの意。沖縄語、琉球語、沖縄方言、シマクトゥバなどとも呼ばれ、その表記（仮名遣い）もさまざまである。
- 4) 琉球語（沖縄方言）でチムは肝、ククルは心を意味し、チムグクルとは情愛、熱い心や思いやりの心を表す。
- 5) この調査は、琉球新報社が県内の20歳以上の男女を対象に、沖縄県民（ウチナーンチュ）の現在の物事の考え方や趣向を把握するとともに、5年に1度、同じ設問の調査を実施することで、県民意識の変容を分析するために行われるもので、2001年に続き2回目の調査となる。いずれの設問も、他県とは異なった沖縄独自の歴史、伝統文化、生活様式に根差した設問であり、その調査結果は自ずと県民自身が描いたウチナーンチュ（沖縄人）の自画像と重なってくる。県民はどのようなウチナーンチュ像を描くのか、それが今後、どのような姿に変わっていくのかを長期的に調査・追跡していこうというのが、本調査の狙いである（琉球新報社2007、5）。
- 6) 沖縄方言で「しま」とは地域または共同体のことで、直訳すれば地域の言葉という意味だが、この場合ウチナーグチと同じ意味で使用されている。
- 7) 比嘉氏は戦後アメリカに移住した「新一世」（沖縄県中城村出身）であるが、日本語、

英語，ウチナーグチを駆使して県人会をまとめる。

- 8) 『琉球新報』2010年1月11日掲載記事より。
- 9) 『琉球新報』2006年3月8日の掲載記事より。
- 10) 世界各地に散在しているウチナーンチュのビジネスマンと連携し、国境を越えたビジネスネットワークの構築と会員相互の研鑽や親善を目的に、1997年にハワイで設立された団体。ハワイを皮切りに、北米や東京、沖縄などで世界大会を毎年開催。11回大会を終えた2007年9月現在、世界に21支部、会員532人を擁し、その知名度も浸透しつつある。
- 11) 元外務事務官で、母親が沖縄県久米島の出身。
- 12) 『琉球新報』2009年6月20日掲載「佐藤優のウチナー評論」より。
- 13) 大和の人の意。一般的に沖縄県人以外の日本人を総称して指す。
- 14) 祖先崇拜の信仰に即した旧盆の行事。広く青年団活動の一環として取り組まれており、三線、締め太鼓、パーランクー（片張りの鉦打ち小太鼓）などを用いて、伝統的な衣装で勇壮に踊る。海外沖縄系コミュニティの若者にも絶大な人気を誇る。
- 15) 沖縄の小さな島を舞台に、60年前の恋に胸を焦がす老婆を巡る騒動を描いた中江裕司監督のコメディ。海外ウチナーンチュ・コミュニティでも話題になった。
- 16) 掻き混ぜるという意。民謡・芸能では、早弾きの歌や乱舞の総称。
- 17) 組踊とは、歌三線（音楽）、台詞、踊り（舞踊）で構成された歌舞劇。1719年、琉球王府時代に、中国からの使者を歓迎する宴での席で初めて上演された。沖縄の史実や故事・説話を基にして、伝統的な沖縄の言葉、舞踊、琉歌と三線音楽がとり入れられている。1972年の沖縄本土復帰にともない、国指定重要無形文化財に指定された。
- 18) 『琉球新報』2009年11月5日掲載記事より。

引用文献

- 岡本太郎，2002，『沖縄文化論』，中央公論社。
- 勝連繁雄，2000，『南島の魂ー私の沖縄文化論』，ゆい出版。
- 勝連繁雄，2003，『組踊の世界ー私の見方・楽しみ方ー』，ゆい出版。
- 小坂井敏晶，2002，『民族という虚構』，東京大学出版会。
- 白水繁彦，2004，「エスニック文化とアイデンティティの世代間継承ーハワイ沖縄系コミュニティにおける事例研究ー」，『移民研究年報』第10号，日本移民学会。
- スチュアート，ヘンリ，2002，『民族幻想論』，解放出版社。
- ソシュール，フェルディナン・ド，2007，『ソシュール 一般言語学講義 コンスタンタンのノート』，影浦峯・田中久美子訳，東京大学出版会。
- 田中克彦，1997，『ことばと国家』，岩波書店。

- 名嘉憲夫, 2008, 『沖縄（うちなー）や戦場（いくさば）になやい』, 新星出版株式会社.
外間守善, 2000, 『沖縄の言葉と歴史』, 中央公論新社.
丸山圭三郎, 1995, 『ことばとは何か』, 星雲社.
琉球新報社, 2007, 『2006 沖縄県民意識調査報告書』
Kaneshiro, Norman. 2002, Uchinanchu Identity in Hawai'i. *Social Process in Hawai'i*,
Vol. 41: 75-94. Honolulu: University of Hawai'i Press.

(きんじょう ひろゆき・琉球大学法文学部准教授・言語社会学)